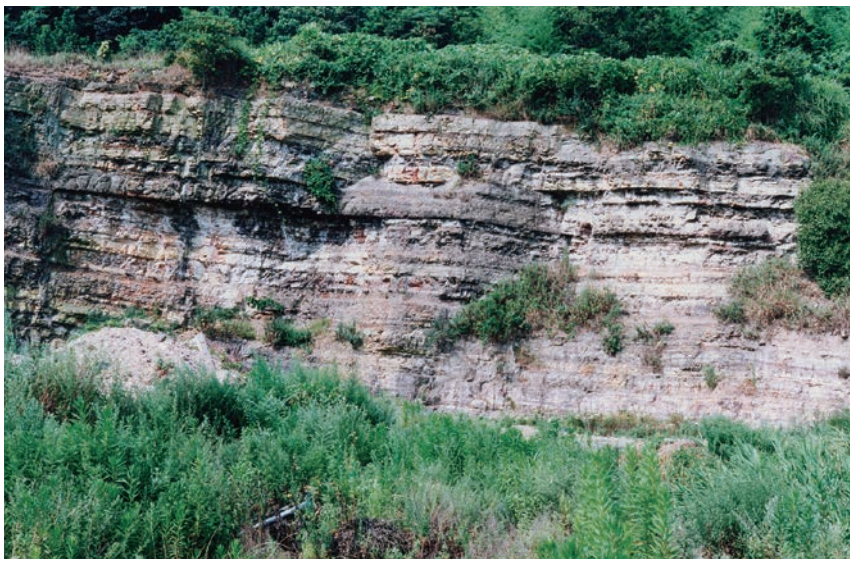


約1800万年前の海だったころの地層・師崎層（南知多町）と化石

知多半島の南部に分布し、海の生物の化石が見つかることで知られています。この師崎層は、知多市域では地下数百mの深さに埋まっていると考えられます。（提供：南知多町教育委員会）

知多の成り立ち

およそ1800万年前、知多市周辺は海でした。その後、海底が隆起して、現在の渥美半島から志摩半島あたりまでが陸続きとなりました。伊勢湾から濃尾平野にかけては淡水の湖である東海湖が形成され、約500万年前には湖の面積が琵琶湖の5倍もあったといわれています。この東海湖は、川から流れ込む土砂の堆積や地殻変動により徐々に小さくなり、数十万年前には消滅しました。

東海湖が消滅した後、土地が隆起して南北に細長い半島型の地形が形成されます。併せて氷河期の海面変動などにより、現在の知多半島が形作られてきたのです。

ドブガイの化石

知多市八幡で出土した、淡水にすむドブガイの化石です。数百万年前にこのあたりが湖（東海湖）だった頃の生き物です。

旧石器時代

市内最古の人間の痕跡として、金沢遺跡（金沢）と野中大曽根遺跡（日長）で発見されたナイフ型石器と呼ばれる石器が挙げられます。住居跡などは見つかっていませんが、これらの遺物から約1万数千年以上前の旧石器時代に知多市域で人間が活動していたことが分かります。

この頃はまだ土器を作らず、石を叩き割って作った石器を使い、食料を求めて移動しながら生活をしていました。また氷河期と呼ばれる気温が低い時期で、海水面が現在より100m以上低かったため、伊勢湾は陸となり、海岸線は渥美半島から数十km南にありました。そのような環境の中で、このあたりは旧石器時代のハンターたちが獲物を探す、狩場だったと考えられます。

ナイフ型石器

昭和時代に発行された知多市誌などでは「知多市の歴史は縄文時代に始まる」とされていましたが、これらの石器の発見により、さらに昔の旧石器時代までさかのぼることが明らかになりました。

縄文時代

縄文時代は、知多市域で定住生活が営まれはじめた時代です。初めに選ばれた場所は二股貝塚（新知）や楠廻間貝塚（八幡）で、丘の上にムラが作られたと考えられ、捨てられた食材のゴミや壊れた道具などが積み重なり貝塚が形成されました。当時は約7000年前の縄文時代早期にあたり、縄文海進と呼ばれる海水面の上昇により、遺跡のある丘のふもとまで海が入り込んでいたと考えられます。海で捕った魚や貝、狩りで捕ったシカやイノシシなどの獣、山で集めた木の実や山菜などを、この時代に発明された土器を使って料理し、食べていたようです。

その後も縄文時代を通じて人々の痕跡が見られ、特に貝塚は6カ所で見つかっているなど、海に面した知多市域は縄文人にとって暮らしやすい場所だったようです。

二股貝塚

旧知多市民病院（新知）の近くの山の中から発見され、約200㎡の貝塚全体で発掘調査が行われました。歴史民俗博物館では、貝塚の一部を保存し、常設展示しており、たくさんの貝殻の中に土器や石器が混じっていることが観察できます。

二股貝塚の土偶

妊娠中の女性を表現していると考えられる土偶の他、ピアスのように耳に開けた穴にはめる土製の耳飾りなども見つかっており、おまじないに使用されたと考えられます。

弥生時代

縄文時代の後半以降、海水面の低下によって沿岸部に平野が形成されはじめました。知多市八幡から東海市大田町にかけても平らな広い土地が生まれ、人々の生活の中心地となっていきます。

大陸から伝わり日本列島に広がった米作りは、このあたりでは弥生時代の中ごろに始まりました。この頃の集落の跡として、法海寺遺跡（八幡）や細見遺跡（八幡）があります。また、弥生時代後期の遺跡である大廻間遺跡（朝倉町）は、標高30mほどの高い位置にあり、他の集団との争いに備えて見晴らしの良い場所に築かれたものです。

細見遺跡の発掘調査

名鉄朝倉駅北側に広がる細見遺跡では、当時の海岸線付近に弥生時代を通じて集落が営まれていました。

古墳時代

知多市内で見つかっている古墳は、寺山古墳（南粕谷）、椿古墳（新知）、岩之脇古墳（八幡）の3基で、いずれも小さな円墳です。寺山古墳は直径約10ｍ、高さは約２ｍあり、大きな石を組んだ石室が地中に残っています。椿古墳は大正時代には副葬品の須恵器が出土したと言われ、現在も崩れた石室の一部が見られます。

下内橋遺跡（寺本新町）では、古墳そのものは見つかっていませんが、発掘調査で埴輪が出土しており、埴輪を並べた古墳が存在していた可能性があります。また、法海寺遺跡（八幡）など古墳時代の遺物が出土する遺跡も各地にあり、そのような場所で生活していた人々の中でも有力な人物のお墓として古墳を築いたと考えられます。

椿古墳の天井石

椿古墳は名鉄古見駅近くの山の上にあり、石室には離れたところから持ち込まれた1ｍ以上の大きな石が使われていました。

平城宮出土木簡

納税品に荷札として付けられていたものです。“贄代郷”がどのあたりを指しているかは分かりませんが、“朝倉里”は現在の名鉄朝倉駅周辺と考えられます。

出典：木簡庫
（https://mokkanko.nabunken.go.jp/ja/6AABUS48000668）

古代

海岸に近い場所の畑などに、長さ10㎝くらいの棒状の土器が落ちていることがあります。これはもともとは器の下に棒状の脚が付く形の土器で、砂浜に脚を突き刺して、周りで火を焚きながら海水を煮詰めて塩を作った、製塩土器と呼ばれる土器です。

この形の製塩土器が使われていた奈良時代に都がおかれていた奈良県の平城宮から、大量の木簡が発見されています。その中には、このあたりから天平元（729）年に塩が調（当時の税制度の内、地方の特産品を納めるもの）として納められたことが記されているものがあります。「1300年前に朝倉に住んでいた和尓部（わにべ）氏が、税金として地元で作った塩を送った」ことが分かる、知多市域に関する最も古い文字資料です。

塩づくりの様子（東浦町郷土資料館ジオラマ）

海水をそのまま煮詰めると大量の時間と燃料が必要となります。そのため、海水を海藻にかけ天日で乾かすことを繰り返した後、海藻を燃やし、その灰をさらに海水に溶かした、塩分濃度の濃い塩水を作ってから製塩土器で煮詰めました。

製塩土器（東海市松崎遺跡出土）

土器を使った塩作りは、古墳時代から平安時代にかけて行われました。

中世

平安時代後半の12世紀ごろ、知多半島で焼き物の生産が始まりました。丘陵部に窯が築かれ、ここで作られた壷や甕は船を使って伊勢湾から全国各地へ運ばれました。また茶碗やお皿などの食器類も作られ、主に地元で消費されました。知多半島全域に広がっていた焼き物作りは、室町時代になると現在の常滑市の一部に集中するようになり、常滑焼として引き継がれていきます。

室町時代の初め頃、知多市域周辺を治めていたのは一色氏で、慈雲寺（岡田）の創建や大興寺（大興寺）の再興、大野城（常滑市大野）の築城などを行っています。戦国時代に一色氏が衰退すると、知多市域北部は寺本城主の花井氏が、南部は大野城主の佐治氏が勢力を強めますが、桶狭間の戦いで今川義元が織田信長に討たれた後は織田の勢力下におかれることになりました。

大草城（大草）は、安土桃山時代に織田信長の13歳下の弟、織田長益によって築かれた城です。知多を支配するために長益が新たに築城を始め、土塁と堀で周囲を囲った本丸と二の丸や、その外側の外堀を備えた三の丸を造りましたが、完成を前に中断し、未完の城となりました。現在は本丸と二の丸の大部分が大草公園として整備され、土塁や堀を見学することができます。

七曲古窯A３号窯

焼き物を焼くために山の斜面にトンネル状に掘った窯跡は、知多市内でこれまで100基以上が見つかっており、消滅したものや未発見のものを合わせると数百基の窯が築かれたと考えられます。この七曲A３号窯は、天井は削られてなくなっていますが、窯の床が全面残っていました。

寺本城

天文23（1554）年の村木砦の戦いの際、花井氏は今川軍に協力しました。そのため、戦いに勝利した織田軍は帰り道に寺本に立ち寄り、城下を焼き払っていったそうです。

大草城二の丸

江戸時代に尾張藩家老の山澄家が大草城の隣に屋敷を築き、城址を保護しました。現在も大草公園内には400年以上前の遺構が残っています。

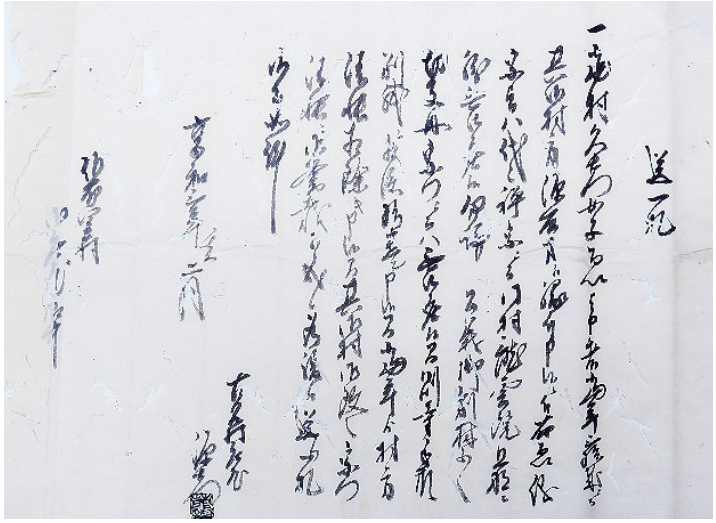
江戸時代

江戸時代、知多半島は尾張藩による支配を受け、知多市域の16の村ではそれぞれに庄屋、組頭、頭百姓がおかれていました。寛文年間（1672年前後）に書かれた、村々の様子を記録した『寛文村々覚書』によると、当時16カ村合計で家屋数約1750戸、約1万人の村人が住んでおり、そのうちの大半は農民だったようです。お米を中心に麦や野菜、豆類の生産や、綿の栽培、海に面した村では魚やエビ、カニなどを捕る漁業も行われていました。

農民たちは田畑に対してかけられた年貢などの税を納める必要があったため、楽な暮らしはできません。そこで田畑の仕事がない時期の出稼ぎや、家庭内での副業も盛んでした。黒鍬稼ぎは代表的な出稼ぎで、尾張藩内のみならず信州や大坂、関東地方など各地で田畑の開墾やため池づくり、道路工事などを行いました。

現在の尾張万歳につながる万歳稼ぎでは、正月に万歳師が家々を回って万歳を演じ、収入を得ました。また、家内では女性による機織りが行われ、家族の着物を織るほか、買い取ってもらうための布も織り、生活の足しにしていました。この布は、木綿仲買人が知多木綿として集め、船で江戸まで運ばれました。

このような暮らしの中、豊作や農作物のための雨を祈ったり、先祖を供養したりするお祭りは、村人たちの楽しみでもありました。神馬や山車、獅子舞など、村々でさまざまな形の行事が行われ、そのうちの一部は朝倉の梯子獅子や日長の御馬頭、岡田春まつりのように伝統文化として現在も引き継がれ、親しまれています。



送一札

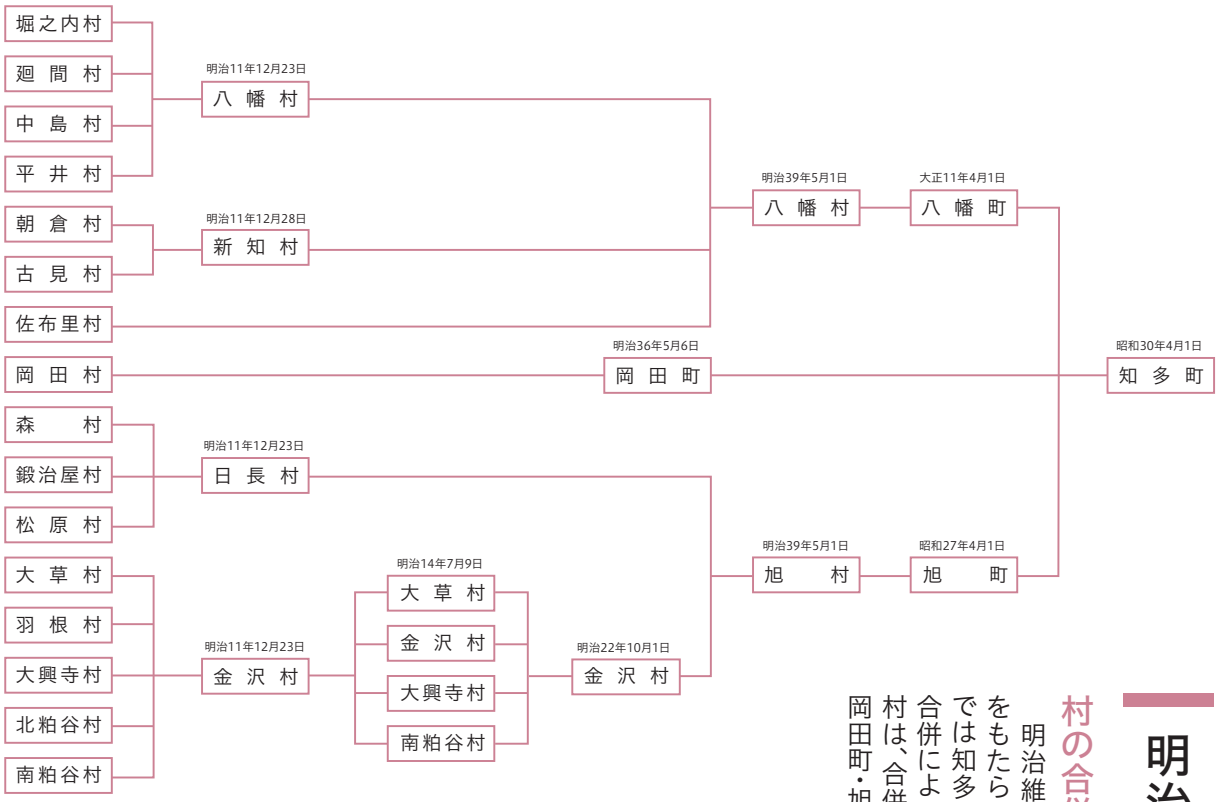
古見村の庄屋から佐布里村の庄屋宛に送られた、嫁入りをする女性の身元を明らかにした文書で、現在の住民票のようなものです。当時禁止されていたキリスト教徒（切子丹）ではないことが証明されています。

道路工事（明治40年ごろ）

知多の黒鍬衆は道路工事や治水、開墾を得意としていました。使用される「黒鍬」は普通の鍬よりも重く大きく、土木工事に最適な道具でした。

岡田春まつりの様子

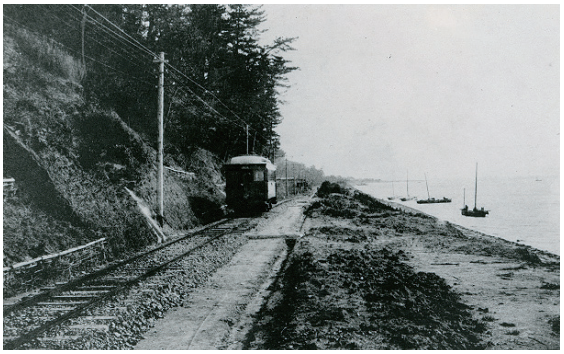
岡田村は慶長11（1606）年に奥村、中村、里村が合併して誕生しました。安永年間（1775年頃）から3台の山車が飾られるようになったといわれています。



明治・大正・昭和時代

村の合併

明治維新による近代化は、日本国内に多くの変化をもたらしました。明治4(1871)年の廃藩置県では知多市域は額田県に所属し、5(1872)年に合併によって愛知県となります。江戸時代に16あった村は、合併によって明治39(1906)年には八幡村・岡田町・旭村の3町村になりました。



長浦周辺(明治45年ごろ)

沿岸部埋め立て前の海岸線沿いに線路が通っていました。海には打瀬船が浮かんでいます。

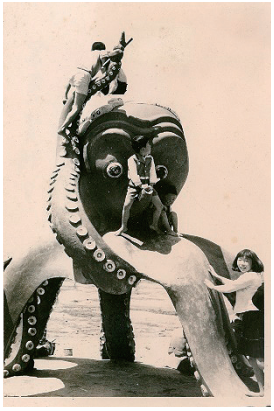
鉄道の開通

明治45(1912)年、愛知電気鉄道(現・名古屋鉄道株式会社)により、知多半島で初めての電気鉄道が伝馬町から大野間で開通します。これにより交通や貨物輸送が向上し、併せて鉄道が沿岸部を走ることから海水浴場の整備が進められました。

兵庫県の舞子浜と風景が似ていることから名付けられた新舞子には、大正時代までに海水浴場の休憩所や旅館、別荘地、当時としては珍しい夜間照明付きのテニスコートなどが整備されました。昭和2(1927)年には新たに長浦海水浴場が整備され、その他、古見や日長にも海水浴場があり、知多市域沿岸部は鉄道による交通と海水浴を中心とした一大リゾート地として発展しました。

古見駅(大正時代末ごろ)

岡田で生産された木綿を古見駅で積み込み、貨物列車で運びました。大正時代には大量の木綿製品を運ぶため、岡田に乗り入れる支線の計画もありましたが、実現しませんでした。



タコのターちゃん(昭和27年ごろ)

コンクリート製のモニュメント「タコのターちゃん」は長年海水浴場のシンボルとして親しまれました。

太平洋戦争

日本は、昭和12（1937）年に日中戦争を、16（1941）年に太平洋戦争を開戦します。男性は召集令状（赤紙）が届くと戦争に行き、女性や子どもたちは軍需工場という戦闘機などを作る工場で働きました。知多市域では、大きな空襲を受けることはありませんでしたが、名古屋へ空襲に向かう戦闘機が上空を通過するときには、防空壕に隠れておびえて過ごしました。

戦時中の19（1944）年12月には東南海地震、翌年1月には三河地震が発生しています。情報が隠され記録がないため、どのような被害があったか明らかではありませんが、戦争に地震にと、人々にとって大変苦しい時代でした。

焼夷弾の筒

昭和20（1945）年3月に、名古屋に向かう戦闘機が旭村北粕谷地区上空で焼夷弾を投下、22戸が被害を受け、1人が死亡しました。

3町合併

昭和30（1955）年4月1日、現在の知多市の前身の知多町が、八幡町、岡田町、旭町の合併によって誕生しました。合併時の人口は3万986人でした。知多の名前は、郡名の知多や特産品の知多木綿、知多海苔のように、この地を代表する名称であったことから採用されました。知多を名乗ることに周辺の自治体からの反対はなかったそうです。

知多町役場（昭和30年4月）

合併により誕生した知多町の役場は、旧旭町役場を使用しました。

伊勢湾台風後

知多町役場の調査によると、知多市内の被害は死者2人、重軽傷者69人、家屋の全壊と流出が計227戸、半壊1156戸などとされています。

合併を祝う

昭和30年10月、合併を記念して式典やパレード、ミス知多コンテストなどが行われました。現在も市章で使われている町章のデザインは、公募により決定しました。

昭和30年代の激動

昭和30年代(1955～1964)は、知多市域で大きな出来事や変化が起こりました。

34(1959)年9月、東海地方を襲った伊勢湾台風は、知多市域で計200㎜以上の大雨と最大瞬間風速55mの暴風をもたらしました。さらに満潮と重なったことで高潮が発生、沿岸部を中心に大きな被害を受けました。校舎が半壊した新田小学校は、翌年新築移転することになります。

36(1961)年9月30日には、牧尾ダムから木曽川を経由して知多半島の先端まで水を流す愛知用水が通水し、4年後の40(1965)年には調整池である佐布里池が完成しました。それまで井戸やため池に頼り、常に水不足に悩んでいた知多地域の念願であり、今も地域の生活や産業を支えています。

また、数千年間にわたり漁業が営まれた知多市域の沿岸部でしたが、高度経済成長期の中で、30年代後半から埋め立てとコンビナート化が進むことになります。漁師たちは漁業や海苔養殖を廃業し、多くがサラリーマンに転職しました。また、内陸部の宅地化も進み、農業や漁業、繊維産業で成り立っていた知多町は、名古屋のベッドタウンへと変化していくことになります。

市制施行

昭和45(1970)年9月1日、知多市が誕生しました。それに先立つ4月に名鉄朝倉駅北側に新築移転したばかりの町役場庁舎が、そのまま市役所庁舎となりました。当時の山本仁三市長は、「『明るく住みよい緑園都市』建設をスローガンに、緑いっぱいの公害のない明るく住みよい都市づくりにまい進する覚悟であります」と決意を語っています。

進む埋め立て(昭和38年ごろ)

北から沿岸部を写したものです。手前の八幡、新知の浜は埋め立てが進みましたが、奥の日長の浜ではまだ海苔養殖が続けられています。

市制施行パレード

市長(左)と議長(右)を先頭に、市制施行を祝う鼓笛隊パレードが行われました。

デジタル写真館　～知多の記憶～

歴史民俗博物館が収蔵する古い写真を中心に紹介しています。
(http://jmapps.ne.jp/chitaaichi2/)